

●この会報の「九条はらまち」全号は、ホームページで見ることができます。向日葵



# 九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.170

2011(平成23)年 8月 9日(火)発行

○66年前の1945(昭和20)年8月9日、原町は陸軍飛行場と原ノ町機関区(駅)や民家が空襲され、3人の犠牲者がでた。○翌10日は原ノ町機関区で6人が犠牲になり、現相馬農高、原一小も空襲されました。

## ヒロシマ・ナガサキで被爆 66年後原発事故で再び被曝の危険が 〈相双地区在住の被爆者は今、どんな思いで原発事故を見ているか〉 後編



◆1945(昭和20)年8月6日・9日、ヒロシマとナガサキに史上初の原子爆弾が投下され、相双地区在住者でその時被爆された方が、20名おられます。◆それから66年後の今年3月、東日本大震災で東京電力福島第一原子力発電所が事故を起こし、その20名のうちご健在の方々は2度目の被曝の危険にさらされたり、現在も遠隔地に避難を余儀なくされたりしています。◆前号の「ヒロシマの被爆者」14名に次いで、「ナガサキでの被爆」6名の現在の様子です。

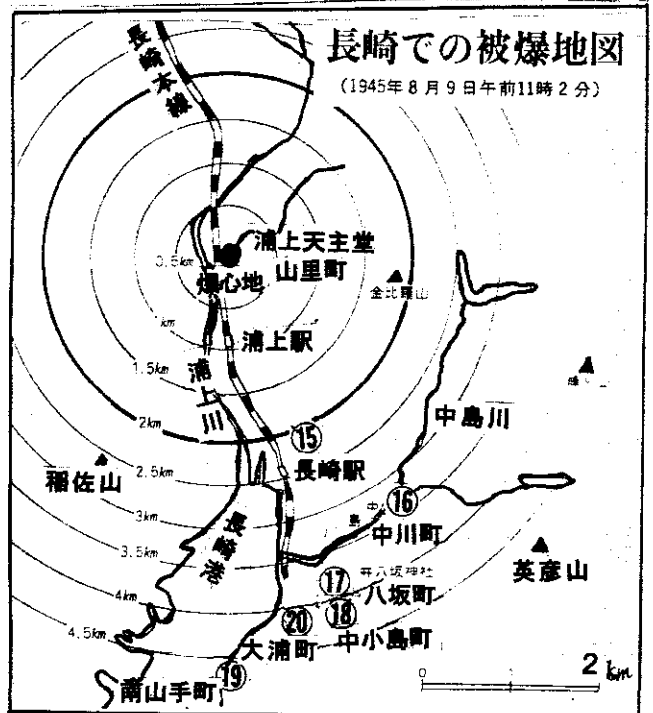
### 相双地区の ナガサキでの被爆者

### 6名の被爆状況と現在の様子は

#### 「二重被爆」だった相馬市のSさん

⑮相馬市原釜のG.Sさん(故人)は、横須賀の海軍にいて、軍の命令で長崎に行く途中、原爆投下の翌日の8月7日、広島市を歩いて通過して入市被爆。そして9日午前10時長崎駅に着き、駅前の旅館で休んでいる11時2分に直接被爆し、「二重被爆者」となる。気がつくやうに諫早の病院でガラス片を抜く顔の手術を受け顔も大きく変形する。戦後相馬市に帰り、苦勞を重ねた。(本会報No.104/106に掲載)

⑯原町区の八牧得勝さん(故人)は長崎出身。15歳の中学生で、下宿先の中川町で昼寝中B29の爆音を聞き窓から空を見あげた時、ものすごい閃光を感じ、「あっ目がつぶれた。私に落ちたのか」と思った瞬間、ドカーンという轟音とともに体が飛ばされた。「原爆や原子核分裂の利用は、自然の摂理に逆らって莫大なエネルギーを生み出すもので、人間の傲慢さを表す非常に危険な恐ろしいもの」と断言していました。(本会報No.141/147に掲載)



⑰双葉郡富岡町の渡辺豊さん(故人)は、日本郵船に入社するが、補充兵として中国で戦ったり、東南アジアに動員され戦いの中で九死に一生を得る。昭和20年8月、新造船に乗り込むため、横浜から広島を通過して長崎に行き、八坂町の「浪花旅館」で休んでいる時に被爆。爆発と同時に、目の前にいた仲間が畳とともに空中に吹き上げられ飛ばされた。赤黒い炎が渦を巻いて空一面に広がっていました。



⑱原町区のDさんは長崎生まれ。小学6年生、12歳の8月9日、長崎市中小島町の自宅でマンガを読んでいた。爆音が聞こえたので家の庭に出てみるとB29が15センチぐらいに見え、何かピラピラしたものを落とした。それが原爆だった。被爆してもしばらくは健康で東京に就職したが、20年経った昭和40年頃から体に変調をきたし、病弱となり、入院や手術をくり返す。今でも原爆の幻覚を見ることがある。(本会報No.109に掲載)

7月23日に映画会社の方と、ご自宅を訪ねてみました<写真>。3月11日の地震で奥様が腰の骨を骨折。しかし震災の混乱で南相馬市では診察も治療もしてもらえず、群馬県の片品村に避難する。結局、娘さんが勤務する埼玉の病院で3月29日に手術し、その間Dさんは看病で、体力も気力も衰え体重が10kgも減り、6月11日に原町区の自宅に戻る。「二重被爆か、とんでもないことだなあ」と話されています。

①⑨ 原町区のK. Kさん(故人)は福島市生まれ。18歳、長崎神学校の生徒の時に被爆。動員先の南山手町の木工工場で、手を握ったまま亡くなった校友のことが忘れられません。

②⑩ 相馬市のK. Sさん(故人)は16歳。海軍の警備隊で爆心地から4㌦の大浦町で、投下された原爆をごま粒ほどの大きさで見て、「B-29から食糧でも落としてくれたのか」などと思った。幸いケガも後遺症もなく健康で過ごす。

○ 今回の原発事故後、以上の相双地区在住被爆者20名以外に、相馬市のH. Sさん、南相馬市のH. Yさん(長崎で被爆・73歳)、飯館村の男性の計3名が被爆されていてご健在であることを知りました。被爆の詳細は不明です。

**まとめ**

アジア太平洋戦争の末期に広島や長崎の原爆で被爆し、66年後の今年3月、再び原発事故で被爆に脅かされるということは、「戦争と事故」による世界的な重大な事件との、稀有で非常に不運な遭遇と言わざるをえません。しかも、いずれもが人間が起こした愚かな「戦争」と、人間の傲慢さと怠慢、無責任さが引き起こした「人災事故」であり、賢明で謙虚さや少しの想像力があれば防ぐことができたはずで

す。相双地区の被爆者20名中、今回ご健在が確認できたのは5名ですが、お会いして感じたことは「もっと怒ってほしい」ということです。戦争を行った“国”、事故の第一原因を引き起こした“東京電力”には本来言葉にならないほどの「怒り」があるはずで

す。でも本当は、無関心で暴走を許していた私たちが、もっと怒って動かなければいけない時かもしれません。(8月15日 文責・山崎健一)

★「転校はとても悲しかった。なぜ私たちがつらい目あうのか分からない。「私はふつうの子供を産めますか?何歳まで生きられますか?」「原発全部止めてほしいです」8月17日、議員会館で原子力災害対策本部や文科省への福島の子供たちの悲しい訴えです。子供たちに「幸せ」や「戦争をしない国日本」を贈るのが大人の役割なのに。

**事務局より**

◆7月22日夜、急遽事務局会を会長宅で開催。少人数の寂しい会でしたが、「震災で大変な時ですが、ともかくできることで活動し、会報は発行するよう努めよう。ホームページを充実しよう」と話し合いました。

◆急な設定でしたが、7月30日(土)の戸田清先生講演会に120名のご出席がありました。それだけ皆さんが「放射線体内被曝」を憂慮されているということです!

**はらま九条の会事務局連絡先**

- 会長: 平田慶登 TEL0244-24-1211
- 会計: 井上由美 〒975-0031 南相馬市 原町区錦町1-43 TEL22-7511・FAX26-0892
- 石田賢二 TEL22-4037 ○ 早坂吉彦 TEL22-0326
- 事務局長: 山崎健一 TEL090-7527-5453 (川崎市に避難中、E-mail:yamazakiken1@gmail.com)
- OHP担当: 大浦祥見 ○ 番場恵子(市外に避難中)



◆また8月23日夜、講演会の反省会を行い、「子どもたちが帰ってこれる原町にしよう!」を合言葉に、九条の会活動をしていこうと確認しました。

◆先月の会報は、避難先が分からない会員へは旧住所で郵送し、転居先などに届いて、約400通中、「宛先不明」で戻ってきたのは約10通でした。

◆この会報は“遠く離れた”避難先の神奈川県で編集しているので、原町とはかなりの温度差があり、的外れのことが多いかもしれません。

◆原稿や意見をお寄せください。ただ今年の年会費未徴収なので、会計が苦しくなっています。

◆“無関心・無知・不勉強”、それに“想像力のなさ”が、さまざまな出来事の誘因になっているような気がします。現在もこれからも、くり返されるのでしょうか。自戒の意味でも。(山崎)

**私も証言する**

ヒロシマ・ナガサキのこと

**相双地域在住者の被爆体験談集 『私も証言する』**

ヒロシマ、ナガサキのこと  
一九八三(昭和五八)年、  
原水爆を考える原町市民の会  
(会長古山哲朗) 編集・発行。  
○約三十年前、相双地区の十名の高校  
教員などが中心になって、相馬双葉地区

に住む被爆者二十名を探し出し、被爆体験談集として出版○今回の原発事故で、再びこの原発立地地域のご健在の被爆者の方々八名が注目され、『毎日新聞』『朝日新聞』『読売新聞』『東京新聞』『中国新聞』『イギリスのタイムズ紙』・広島テレビ・NHKテレビ・映画会社タキシースなどから、問い合わせや紹介依頼がありました○本人のお許しを得て紹介し、四月以降記事になったり、放映されています。(※本会事務局の山崎は、当時「考える市民の会」の事務局担当でこの本の編集者でしたので、被爆された方々と行き来がありました)

★8月10日夜、東京代々木公園で“アトミックカフェ・イン・ザ・パーク”というイベントに、「つなごろう南相馬」の若者も参加。最後に加藤登紀子さんが、若松文太郎さんの詩「神隠しされた街」を朗読されたそうです。

